

英語教育における異文化の扱いについて (1)

—文化の個別的な特性から普遍的な特性への気づきを促す—

土 屋 澄 男

HOW SHOULD CULTURES BE TAUGHT IN THE ENGLISH LANGUAGE CLASS ?

SUMIO TSUCHIYA

There is no consensus among teachers on how to deal with foreign cultures in the English language class. Some teachers insist that English should be essentially acultural because it has already been the medium for international communication. Many teachers, however, contend that just for the same reason, it has been more and more important to induce their students to become aware of a variety of cultures of the world. In my opinion, most cross-cultural studies in the past have focussed on the contrasts between cultures and have tended to ignore their more universal features hidden under all human behavior. I will propose in this article to use the Kluckhohn model as a means of analyzing the value system of a particular culture so that we can turn our students' attention to the more universal features of human culture. Thus our students will eventually be able to take more sympathetic attitudes toward different cultures alien to them.

要 旨

英語教育における異文化の扱いはあいまいである。英語は国際語だから「脱文化」でよいという意見もある。しかし英語教科書で見る限り、扱う文化はグローバルなものとなり、多様化しており、異文化の教育はますます重要となっている。従来、異文化の教育は文化間の表面的な違いに重点が置かれていたが、異文化に対する寛容な態度を養うという観点から、これからはもっと文化の普遍的特性に気づかせる指導が必要ではなかろうか。クラックホーン・モデルはそのような指導の可能性を示唆してくれる。

1. はじめに一問題の所在

英語教育における異文化理解の重要性についてはつとに指摘されていることであるが、それをどうカリキュラムに位置づけ、実際の授業に展開していくかについては具体的な提案がほとんどなされていない。それどころか、その基本的な考えさえ明確にされていない。伊藤健三は本誌『言語と文化』第6号において次のように述べている。⁽¹⁾

「今日、外国語教育は、国際化社会に対応するための学校教育の一環として、目標外国語の「言語能力」(communicative competence)を養い、さらに、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることが教科固有の目標の一つになっている。この目標は、目標外国語圏の「文化」についての関心を深めるというもう一つの目標と、両両相まって、国際理解を深めるというより高い次元の目標へと発展してゆくべきものとされていて、外国語教育の価値を教養上の価値と実用上の価値の二つに別けて論じていた時代と違い、外国の文化に対する関心を深めるということは、外国語教育の副次的目標とは考えられない、

というのが今日の建前である。しかし、少なくともわが国の英語教育の実践においては、「文化」の教育はほとんど付随的にしか扱われていないのが実情である。」

高等学校や大学での第二外国語としてのフランス語やドイツ語の授業が、フランスやドイツの文化を抜きに行われるということは、ほとんど想像することもできないことである。他のいかなる言語を学ぶ場合にも、おそらく、文化を抜きにして考えることはできないであろう。

ところが英語の場合には「脱文化」(acultural)ということがあるていど可能となる。なぜなら英語はいまや英米の言語であるばかりでなく、政治的国境を超えて広がるサブカルチャーの伝達手段となっているからである。たとえば、コンピューター・プログラマーが英語を使うのは、英語が情報工学の不可欠のメディアだからである。日本のビジネスマンが香港やマレーシアやインドネシアのマネジャーと英語で話すのは、相手も英語を知っていれば、通訳を使うよりもその方が手っ取りばやいからである。また、科学者が研究論文を英語で発表するのは、科学的コミュニケーションというサブカルチャーにおいては、英語がより広く、より速く、読者に情報を伝えることができるからである。

以上のような理由で、日本における英語教育も、近年、英米語としての英語よりも国際語としての英語、つまり国際的なコミュニケーション手段としての英語に重点が移ってきていると言ってよいであろう。たとえば発音に関して、以前はアメリカ発音か、イギリス発音かというようなことが議論の対象となったが、現在は、学習初期の段階においてはある特定の地域の発音に準拠することが必要であろうが、それ以降は国際コミュニケーションの手段として通用しさえすればよいという考え方に変ってきている。

ところで、中学校や高等学校で使用される英語のテキストでは、文化はど

のように扱われているであろうか。上に述べたような「脱文化」の明らかな傾向が見られるであろうか。結論を先取りするならば、文部省検定教科書に見る限り、英語の基礎段階ともいべき中学・高校の教科書題材の大部分はなんらかの文化的要素を含んでおり、その文化の種類は極めて多様化していると言うことができる。かつてのように、アメリカまたはイギリスと言ったある特定の国または地域に題材を限定している教科書は皆無である。すべての教科書が世界の広い地域に題材を求めており、したがってその扱う文化は多様である。

たとえば、大喜多喜夫の調査によると、平成5(1993)年度版中学校英語科教科書6種類(1年から3年生用全36冊)に出現する文化的要素は全部で171件で、そのうち特定文化に関するものを127件(74%)、文化一般に関するものを33件(20%)かぞえることができたという。それぞれの内訳は次のようである。⁽²⁾

<特定文化に関するもの127件の内訳>

日本	45件
アジア	8件(シンガポール, ネパール各, アジア全般, インド, 韓国, 中国各1)
ヨーロッパ	10件(イギリス8, オランダ, スイス各1)
アフリカ	4件(ケニア2, セネガル, タンザニア各1)
南アメリカ	5件(ブラジル2, ペルー, ポリビア, アルゼンチン各1)
北アメリカ	47件(アメリカ45, カナダ2)
オセアニア	8件(オーストラリア5, ニュージーランド3)

<文化一般に関するもの33件の内訳>

国際奉仕活動	4件
平和教育	9件
先住民族	5件
人権問題	2件
環境問題	10件
動物保護	2件
食糧問題	1件

英語の教室で扱う文化の種類がこのように多様になると、かつてのように、アメリカやイギリスの文化を中心に授業を展開することはほとんど不可能である。好むと好まざるとにかかわらず、英語教師は世界の様々な文化を扱わざるを得ないことになる。むしろこのように言った方がよいかもしれない。これからの英語教育の目標は、英語という言語の指導を通して、世界の様々な異文化に親しませることである、と。ここで「異文化に親しませる」とは、世界には自分を取り巻く文化とは非常に異なる文化が存在することに気づかせ、異質なものに対する感性を培い、異質ではあるが結局は同じ人間の営みであるとして受容できるような寛容的態度を養うということである。英語が国際語であるという理由で文化を除外するような教育は、科学やビジネスなどの非人間的な特殊なコミュニケーション場面においては考えられるかもしれないが、人間どうしの通常のコミュニケーション場面においては、結局それぞれの人間の行動を規制している文化を考慮せざるを得ないわけで、文化の教育は英語教育において依然として重要なテーマである。そしてそこで取り上げられる文化は、学習者自身の日本の文化やイギリス、アメリカなどの英国国民の文化だけでなく、いまや地球上に存在するあらゆる文化へと拡大しつつあるということである。

すると次の疑問が生じる。英語教育において、その取り扱う多様な個別文化のすべてを考慮に入れることは可能であろうか、という疑問である。おそらくそれは不可能であろう。しかしよい英語の教科書かどうかの判定基準として、世界の様々な地域をバランスよく扱っているかどうか、ということが議論されることがある。この教科書は東南アジア地域を扱っていないとか、アフリカについての題材が抜けている、などの議論である。しかし「バランスよく」とはどういうことであろうか。世界の5つの大陸を公平に扱うということであろうか。もしそうだとすれば、そのような教科書を作ることは可能であろうか。人間が作り上げてきた個別文化はおそらく世界に無数に存在するであろう。したがって、それらの中からどの文化を選択するかは極めて困難な仕事である。いまのところ、教科書編者の識見にまつほかないと思われる。選択の原理は、「特定の地域の文化に偏らないように、世界のできるだけ広い地域から、これからの人間生活にとって価値ある文化を取り上げること」ということになろう。英語の教科書であるから、英語を第1言語とする人々の文化が多く取り上げられるのは当然である。しかし少数民族の文化や消滅しつつある文化であっても、教育的価値のあるものは積極的に取り上げてよいであろう。

それでは、英語の教科書が世界の様々な個別文化のすべてを取り扱うことができないとすれば、選択された限られた範囲の個別文化の学習を通して、英語教育は文化について何を学ばせようとするのか。

すでに示唆したように、まず第1に、それは自己を取り巻く文化と異なる文化の存在に気づかせることである。われわれはたまたま生まれ育った土地の言語と文化を身につける。そしてそれを自然なものとして感じる。したがって自分と異なる言語や文化に接すると、それらを不自然で奇妙なものと感じる。放っておくとそれらに対する偏見を助長することになる。しかし少し考えてみれば、これは無知による偏見であることが分かる。人

間は生まれた時には地球上のいかなる言語、いかなる文化をも習得することができる能力を与えられており、たまたま生まれ落ちた土地の言語と文化を身につけるにすぎないのである。多くの異文化の存在を知ることによって、人は自己の文化を相対化することができるようになる。

文化の教育は、第2に、異質な文化に対する感性を培うことである。すでに述べたように、人は自分と異なる文化を不自然で奇妙なものと感じる。したがって率直に受け入れることが難しい。放っておくと、それらをシャットアウトしようという心理機制が働く。いかなる民族文化も、それぞれの民族の必要性に起因していることが分かれば、決して不自然でも奇妙でもないことが理解できるのである（ただし特定の文化が人間にとって普遍的価値を持っているかどうかは別問題である）。大切なことは、異質な文化に対する感受性を高め、どの文化にも積極的に接することができるようにすることである。

文化の教育の第3は、さらに一歩すすんで、異文化を受容する寛容な態度を養うことである。そのためには、個々の文化特性の違いに注目するだけでは不十分である。それぞれの文化の根底にある人間文化の普遍的特性に気づかせることが必要である。たしかに表面的には異っているが、結局は同じ人間的営みから生まれたものであることを理解することによって、人は他の文化を自分の中に取り入れることができるようになる。異質なものを自己のうちに取り込むことによってのみ、われわれはより大きく、より豊かな人間となることができる。異文化の教育は、地球上の人間が21世紀において平和的に共存するために、最も重要な課題の一つである。

では人間文化の普遍的な特性とはどのようなものであろうか。周知のように、チョムスキーは多様な言語の根底にある普遍的な特性に着目し、普遍文法（universal grammar略してUG）を開発しつつある。それと同じように、われわれはすべての人間文化の根底にある文化の普遍的な特性に着目しよう

とする。たとえばクラックホーンの考案したモデルは、そのような普遍的文化特性の存在を示唆しているように思われる。⁽³⁾

そこで、以下にまず言語に現れる文化の個別的特性の問題を取り上げ、その後に普遍的特性について考察する。

2. 言語に現れる文化の個別的特性

文化は一般に次のように定義される。

“the sum total of ways of living built up by a group of human beings and transmitted from one generation to another” (ある人間集団によって形成され、一つの世代から次の世代へと受け継がれる生活の仕方の総称)

—*Random House Dictionary*

ここには、衣食住を初め、技術・学問・芸術・道徳・宗教などの物心両面にわたる生活形成の様式と内容が含まれる(広辞苑)。

しかし言語に現れる文化の個別的特性を考える時、われわれは文化をもう少し限定して用いる必要がある。人々が言語によってコミュニケーションを行う時、彼らは自分たちの属する集団が共有する知識、知覚様式、世界観ないし価値観に基づいてそうしているのである。そこで、言語に現れる文化の個別的特性を次の3つの面から考察してみる。

——事実に関する知識

——知覚様式

——世界観・価値観

(1) 事実に関する知識

人は自分の属する集団と事実に関する様々な知識を共有する。その知識の種類をここに分類して示すことはしないが、人々は互いにそのような知識を所有していることを前提としてコミュニケーションを行う。多くの日本人は「関ヶ原の合戦」がだれとだれの陣営の戦いで、どちらが勝ったかを知っている（その正確な場所や年月は知らないかもしれない）。多くのイギリス人は ‘the Battle of Hastings’ の年を記憶している（だれが勝ったかは知らないかもしれない）。また多くの日本人は今年（1995年）東京地下鉄のサリン事件で多くの人々が殺されたことを記憶している（正確な日付や死亡した人数は思い出せないかもしれない）。われわれは、人や物や場所や出来事についての多くの知識を他の人々と共有しており、それらを利用してコミュニケーションを行うのである。そのような知識を「スキーマ」(schema)と呼ぶことがある。

したがって、メッセージの送り手と受け手がトピックに関する共通のスキーマを所有している場合にはコミュニケーションは一般にスムーズに進行する。しかし、メッセージの送り手と受け手がトピックに関する共通のスキーマを持っていない場合には、誤解が起こったり交信不可能な事態が生じる。

ために次の英語の質問に答えてみよう。(4)

- 1) Who said ‘Veni, vidi, vici.’ ?
- 2) In what sports would you see:
 - a) a throw-in?
 - b) a lineout?
 - c) an off break?
 - d) a chicane?
- 3) What is the date of Thanksgiving?

- 4) How many inches are there in a yard?
- 5) What were the names of the Beatles?
- 6) If you set out from London on the M4, in which direction would you be heading?
- 7) What happens in 1995?
- 8) Who was Don Quixote's sidekick?
- 9) Is A4 larger or smaller than A3?
- 10) Who said, 'Am I my brother's keeper?' ?

これらの質問の答えは注を見ていただくとして、日本人でこれらの質問のすべてに答えることのできる人はそんなに多くはないであろう。これらは事実に関する知識を問う質問であるが、たとえ英語が良くできる人でも、いくつかの質問に答えることは難しい。それぞれの問いの難易は、答える人がどの人間集団に属しているかによるであろう。

しかも、人はみな多くの社会集団に属している。たとえば、夫婦、家族、学校、職場、地域、民族、国家など。そして最後に人類という大集団の一員であることを知る。われわれは自分たちの属する様々な集団と様々な形で知識を共有しているのである。個人が地球上のすべての知識に精通することは事実上不可能であるから、われわれがコミュニケーションを行う場合に大切なことは、互いに相手がどの集団に属しているかを意識し、自分の所有しているスキーマを相手に期待するなどして、過重な負担を相手にかけないようにすることである。

(2) 知覚様式

人は自分の属する集団と事実に関する知識だけでなく、知覚様式をも共有する。たとえば多くの語は「指示的意味」(denotation)のほかに「内包

的意味」(connotation)を持っている。英語では‘dogs’は「人間の友」、‘sheep’は「従順」、‘goats’は「頑固」、‘donkeys’は「無口」の意味を内包している。これらの動物と馴染みのない国ではそれらの内包の意味を理解できないかもしれない。

それぞれの言語で用いられる比喩的表現がその文化の知覚様式を表していることが多い。英語の次の比喩やことわざは、イギリス人の知覚様式をよく反映していると思われる。

11) An Englishman's home is his castle.

(イギリス人の家庭は彼の城である。)

12) He looked as black as thunder.

(彼はものすごく怒った顔をしていた。)

13) Barking dogs seldom bite.

(吠える犬はめったに噛みつかない。)

14) Let sleeping dogs lie.

(寝ている犬はそのままにしておけ。)

15) After a storm comes a calm.

(嵐のあとには風がくる。)

上の例のうち11)は隠喩(metaphor)、12)は直喩(simile)と呼ばれる表現で、13)~15)はことわざから取ったものであるが、これらは他の文化の人々も少し考えてみれば、あるいは説明を聞きさえすれば納得できるので、かなりの普遍性を持っていると言うことができよう。これは人間の知覚に共通性が高い証拠であるとも考えられる。

(3) 世界観・価値観

言語がそれを用いる人々の暗黙の世界観や価値観を表すことがある。英語の 'Good-by' が 'God be with you' の短縮形であることは日本人の中学生でも知っているであろう。また英米人が 'God bless you!' と言う時、それは彼らのキリスト教文化を反映しているのである。

そのような世界観や価値観は、暗示的また明示的に、それぞれの言語の格言や神話に表されることが多い。日本人の世界観・価値観は仏教や儒教の影響を受けているであろう。欧米キリスト教国の文化は、当然、キリスト教の世界観・価値観に立っている。次の語句や表現はいずれも聖書から出ているが、聖書に馴染みのない人々には理解が難しいかもしれない。

16) the cry of Sodom and Gomorrah (創世記18:20)

17) The Lord is my shepherd. (詩篇23:1)

18) The fear of the Lord is the beginning of knowledge. (箴言1:7)

19) Blessed are the poor in spirit. (マタイ5:3)

20) Love your enemies. (マタイ5:44)

神話には宗教的神話だけでなく文学的神話と呼ばれるものも含まれる。「トロイのヘレン」や「ロミオとジュリエット」や「不思議の国のアリス」はいまや世界中の人々に親まれる文学的神話であると言ってよいであろう。しかしそれぞれの文化にはその成員だけが共有する文学的神話が存在するであろう。

さらに「現代的神話」(contemporary myth)とも呼ぶべきものがある。スポーツ界や大衆文化や王室の行動に関して、メディアは現代的神話の形成と普及に熱心である。今日、ほとんど世界中の人々が「マラドーナ」「マドンナ」, 「チャールズとダイアナ」の名前を知っている。もちろん、

それぞれの人間集団に固有の現代的な神話が存在する。

このように、ある人間集団によって共有される文化は、その集団に属する人々に共通の知識、知覚様式、価値観、伝承の塊といったもので、それらの特性の多くは、全部ではないとしても、言語表現の中に現れるものである。われわれはみな複数の人間集団に属しているため、言語を用いる時、いま自分の属しているどの集団に焦点が当てられているかによって、それぞれの集団に固有の文化的特性を適宜に使い分けているのである。

そこで次にクラックホーン・モデルに基づいて、文化の普遍的な特性について考察する。

注

- (1) 伊藤健三「外国語教育における「文化」の扱い」『言語と文化』第6号、文教大学言語文化研究所、1993.
- (2) 大喜多喜夫「中学校英語教科書に見られる国際理解性」*The Language Teacher Vol.19, No.6*. 全国語学教育学会、1995.
- (3) Kluckhohn, Florence R. & Fred L. Strodtbeck, *Variations in Value Orientations*. Greenwood, 1976.
- (4) Bowers, Roger, "Memories, metaphors, maxims, and myths: language learning and cultural awareness," *ELT Journal Vol. 46, No.1*. OUP, 1992.

1)~10)の答えは次のようになるであろう。

- 1) 'Veni, vidi, vici.' は「われ来たり、われ見たり、われ勝てり」を意味するラテン語で、ジュリアスシーザーがローマ元老院に勝利の報告をした時の言葉。この言葉はヨーロッパでは広く知られており、翻訳はほとんど不必要である。

- 2) 'throw-in' はボールをラインの外から投げ込むことで、もともとサッカー用語である。バスケットボールでも使う。b) 'lineout' はラグビー独特の用語で、ボールを外から投げ込むこと。c) 'off break' はクリケット用語で 'deviation of ball from off side' (COD)の意。d) 'chicane' はグランプリ障害物自動車レース。a)と b)はかなり広く知られているが、c)とd)を知っている人は非常に限られているであろう。
- 3) 11月の第4木曜日である。アメリカ人以外には知っている人は少ないと思われる。
- 4) 1ヤードは36インチである。いまメートル法が使われるようになっていたので、英米人でもこの答えを知っている人は限られているかもしれない。
- 5) John, Paul, George, and Ringo. かつてはこの順で呼ばれており、世界でも広く知られていた。
- 6) M4はロンドンから西へ向かうハイウェイ。イングランドに住む人以外には知る人は少ないであろう。
- 7) この答えは人によって違う。
- 8) 答えは「サンチョ・パンサ」。ドンキホーテの名前と共に、ヨーロッパではもちろん、日本でも広く知られている。
- 9) A4はA3の半分の大きさである。知る人ぞ知る。しかしアメリカのA4は違うので注意。
- 10) 旧約聖書のカインである。カインは弟アベルを殺して神の前でしらをきった(創世記4:9)。

(文学部教授)